
いつかの会話

時々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつかの会話

【Nコード】

N9793H

【作者名】

時々

【あらすじ】

ぼく（敬太）とおばあちゃんの日常の1コマ。近未来設定。山もなく谷もない短い話です

ぼくが生まれたころにはすでに“ケータイ”が存在していた。“ケータイ”というのは、携帯電話の略ではなく、携帯型ロボットの略。“ケータイ”は高さ約10cmでヒト型や動物型など色々な形がある。高機能のAIが搭載されていて持ち主の声や思考を読み取って動く、とにかくすごいロボットだ。

昔、ケータイと呼ばれていた携帯電話はケータイではなく『電話』と呼ばれ、家庭にある固定電話は『固電』と呼ばれている。そんなぼくたちの日常は昔の人には想像もつかないだろう。……と、ぼくのおばあちゃんが言っていた。

ぼくのおばあちゃんは新しいものが大好きだ。ぼくが新しく出たおもちゃをお母さんやお父さんにねだって、やっとの思いで買ってもらったとする。そして、おばあちゃんに自慢しに行くと、おばあちゃんはもう持っていて使いこなしているのだ。

“ケータイ”もその一つだった。

ぼくのおばあちゃんはぼくが知る限り一番ケータイを使いこなし、修理や改造もできる。だから、ぼくはおばあちゃんとケータイの話をするのが大好きだ。

今日もぼくが住むマンションから少し離れた一戸建てへ向かう。おばあちゃんは縁側に腰かけ、ぼんやりと庭を眺めているようだった。ぼくが声をかけると、数秒間をおいてからこちらを振り向き、笑顔でこう言った。

「あら、いらっしやい貴志」

いつものようにぼくの名前を間違えるおばあちゃん。

「ぼくは敬太！ 兄ちゃんと間違えないですよ。毎日来てるっていうのに、なんで毎日間違えるのさ」

「おばあちゃんは昔から物覚えが悪くてねえ」

にこにここと人の良さそうな笑顔を浮かべるおばあちゃん。

「ケータイのことはすぐ覚えて何でも知ってるの？」

「そうよねえ、なんでかしらねえ」

縁側で玄米茶をすすり、膝の上で寝ている猫をなでるおばあちゃん。もう、このやり取りはいつものことだ。ぼくが物心ついた頃からずっと間違えられている。

ぼくとしては、なんとかしてぼくの名前を毎回教えなくても、呼んでくれるようになってほしいけれど、諦めたほうがいいのだろうか。でも、諦めてしまふとなんだか切なくなるから諦められない。ぼくはどうすればいいんだ。

おばあちゃんは痴呆症、というわけではない。覚えているのは心が強く動かされた事で、そうでない事は覚えられないらしい。しかし、覚えられるくらい感動したときでも忘れてしまっていることもある。そのほかは、なんとなく覚えているだけ。だから、若いころはそれですいぶん苦労した、とおばあちゃんは語った。

都合のいい人だと、ぼくの親は言うけれど、本当はつらいんじゃないかと思っている。忘れたいことは覚えていて、覚えていたいことは忘れてしまふ。本当はそういうことなのではないのだろうか。

おばあちゃんはいつもカメラとメモ帳を持ち歩いている。カメラは映像、メモ帳は言葉。この二つがおばあちゃんの記憶を補っている。

「今度、ケータイの地区大会があるわね」

不意におばあちゃんが呟いた。手元のカメラはおじいちゃんに買ってもらったデジタル一眼レフ。おじいちゃんはぼくが幼いころにおばあちゃんの目の前で車に轢かれて亡くなってしまった。おばあちゃんはおじいちゃんが死んだことは覚えていても命日は覚えていない。でも、どうして死んだのかは覚えている。

「敬太は大会に出るんでしょう？ おばあちゃんが調整してあげよメンテナス

うか」

こういう話をしている時のおばあちゃんは目が輝いている。嬉しいのだろう。一人が住むにしては広すぎる一軒家にひとりだけ。一か月に一度は掃除を手伝うけれど、丸一日かかってしまう。

「調整の方法、教えてよ。おばあちゃん教えるのうまいんだからさ」
お世辞交じりに答えればおばあちゃんは照れ臭そうに笑う。

「仕方ないわね。そんなに言うなら教えてあげるわ。でも、その前に」

照れ隠しに偉そうに答えるおばあちゃんは、ポケットから一枚の紙を取り出す。きれいに四つ折りにたたまれた紙がおばあちゃんの皺くちやの手で開かれる。

「参加の申し込みをしなきゃ、ね」

ぼくの目の前に紙をつきつける。紙には『白熱せよ！　これがケ―タイ戦争だ！』というなんと熱いキャッチコピーが赤字で書かれ、漫画のキャラクターが握りこぶしを前に突き出し、大きく口を開けてキャッチコピーを叫んでいるように見える。背景には実際の炎を撮影したものが使われていた。

「古臭いわねえ」

おばあちゃんがいつのまにか眼鏡をかけてカメラでぼくを写真に収めた。

「そうかな、逆に新しいと思うけど」

眼鏡がずれているのを直したおばあちゃんの言葉に答えながら、メモ帳に残る言葉を感じ、ファインダー越しに見える世界はどんなものなのだろうかと思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9793h/>

いつかの会話

2010年12月9日14時35分発行